

令和7年度（2025） 後期始業式 校長あいさつ

みなさん、おはようございます。学校長の梅田です。

早いもので今年も月が二けたとなりましたが、折からの猛暑がやみ、ようやく秋めいてきたとはいえ、まだまだ昼間は夏と見まごうばかりの日差しが照り付けています。この夏の猛暑の中、勉強に、行事に、部活動に、前向きに取り組んでいる皆さんの姿をたくさん見ることが出来ました。先日の体育祭も素晴らしかったです。夏休み中も皆さんの活躍の様子を聞くことが出来、大変うれしく思いました。本当にお疲れ様でした。

ところで、皆さんはどのような夏休みを過ごしたのでしょうか。新しいことにチャレンジした人もいるのではないかと思います。私は小学生の頃より戦前のドイツ、フランス映画を見ていたという大の映画好きですので、映画を見て過ごすこともありました。そこで、昨今の状況を見るにつけ、ある映画を思い出すことがあります。1968年に公開されたスタンリー・キューブリック監督の「2001年宇宙の旅」という映画です。原作の元になったのはさらにさかのぼる1951年、SF作家のアーサー・C・クラークによって書かれたものです。この映画の中に、HAL9000というコンピュータが登場します。このHAL9000は、調査で知りえた機密情報を誰に知られることなく持ち帰ってくるという指令を受けていました。そのために、宇宙船の搭乗員たちを排除していくという行動に出ます。恐ろしい話ですが、最近のAIを取り巻く状況を見ていると、単にSF映画の中の話だという風には片づけられない気がしています。

先日友人から家族で撮影したという写真を見せてもらいました。しかしそれはイラスト風に描かれた写真で、非常にクオリティの高いものでした。てっきりイラストレーターが描いたものかと思ったのですが、友人によるとスマホに搭載されているAIアプリで作成したというのです。やり方を聞いて早速自分でもやってみました。まず飼っている犬の写真を登録し、サンリオ風にしてくれとかジブリ風にしてくれとコマンドを入れる。するとほんの数秒で、想像していたよりもはるかに高い完成度で画像が出来上がりました。たいへん感心するとともに、なるほど、これがAIが職業を駆逐していくということなのだなと実感しました。

皆さんは「AIシンギュラリティ」ということばをご存じですか。これはAI、すなわち人工知能が人類の知能を超える技術的特異点を表すことばです。アメリカの学者、レイ・カーツワイルによれば、この特異点は2045年にやってくるというのです。わずか20年後ですね。はたして20年後に、AIが人間の知能を大幅に凌駕するのかどうか、興味深いところです。数年前に読んだAIに関する著作には、所詮AIが人間の英知を超えることはありえず、文芸や美術、音楽などの創作を行ったり、東京大学の入試問題を合格レベルまで解答することは今後もあり得ないと書かれていました。著者はコンピュータ研究の第一人者であったある大学の教授でしたが、それからわずか数年で、生成AIの誕生により、AIが単なる演算能力に優れた人工物であるとは言えない状況になってきました。AIが作成した写真が世界的なコンテストで賞を取ったり、AIの書いた小説がもてはやされたり、こうした状況は私たちの想像をはるかに超えて現実のものとなっています。

私たちの生活を大きく変えるAI。その影響はこれからどこまで広がっていくのか。しかしここで忘れてはいけないのは、人間は社会的存在であるということです。社会とはもちろん、人々のコミュニケーションで成り立つ営みのことです。人々の共同体の中にAIを含めることが出来るのか。もしそれを許してしまうと、AIによる人間への支配が始まってしまうという不安を抱いてしまいます。AIの積極的活用はもはや避けることが出来ず、そこから目をそらすことはできません。

SSH指定校である多摩高校には将来を担うイノベーション人材を育てるというコンセプトがありますが、新しい価値を生み出すために、AIを最大限利用しつつも、人間生活の中でAIの関与をどこまで認めるのかは人間次第であって、どのような状況になろうと基本は人間だという事実を忘れてはいけないのだと思います。ですから皆さんは、友人たちと大いにコミュニケーションをはかり、社会的存在として力を合わせて課題の解決に向かっていく姿勢を常に忘れないでください。

さて、今年度も折り返しとなりました。毎日の生活にメリハリをつけ、悔いの残らぬよう過ごしましょう。後期も皆さんの活躍に大いに期待しています。